

Title	後期ニーチェの根本思想(Abstract_要旨)
Author(s)	内藤, 可夫
Citation	Kyoto University (京都大学)
Issue Date	1997-03-24
URL	http://hdl.handle.net/2433/202375
Right	
Type	Thesis or Dissertation
Textversion	none

氏 名	ないとうよしお 内 藤 可 夫
学位(専攻分野)	博士(人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 18 号
学位授与の日付	平成 9 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 人間・環境学専攻
学位論文題目	後期ニーチェの根本思想

論文調査委員	(主 査) 教授 竹市明弘	教授 有福孝岳	教授 小川 侃
--------	------------------	---------	---------

論 文 内 容 の 要 旨

『後期ニーチェの根本思想』と題するこの論文は7章からなり、後期のニーチェ思想に認められる根本的な主張を明らかにすると共に、ニーチェ哲学の意義と限界とを確定するものである。

まず第1章の「ニーチェ後期思想の俯瞰と諸概念の意義」においては、彼の後期思想全体を俯瞰することによって、第2章以降の議論の前提となる諸概念の基本的な理解が確認され、論文全体の議論が方向付けられる。

第2章は「ニヒリズムと権力への意志」と題され、「権力への意志」概念をニーチェのニヒリズムに関する議論から再構成し、その理論的な問題点を明らかにする。ニーチェは、現代の精神状況であるニヒリズムの本質的な問題が超感性的存在者の措定にあると主張する。彼はこの洞察に基づいて超感性的な実体的存在者の概念を否定し、主客未分の根源的な自然としての「生成の世界」という世界観と「権力への意志」概念を導く。だが、ここで「権力への意志」は、実体の概念規定を反転させた、「非持続的」、「非自己同一的」な存在者として規定されている。このようなそれ自身形而上学的な概念を主張することによって、主客対立図式に基づいた世界理解を根本的に克服することにはならないし、またニーチェ自身が形而上学の不可能性を主張していたこととも矛盾することになる。ニーチェ思想の本質的意義を知るためには、矛盾を持ったこれらの主張の背後にある彼の根本的な思想を明らかにする必要がある。

第3章の『「生成」の概念』においては、「生成」概念と「生成の世界」という世界観を通じて表現されているニーチェの根本的な思想が明らかにされる。「生成の世界」という世界観は、実体的存在者の否定を通じて導かれるものであり、既存の哲学説への批判という側面と、積極的な世界観の提示という二つの側面を持つ。ここで提示されるのは、あらゆる事象が相互的な関係において生起する世界である。そこでは、世界を己に対立するものとして把握することが否定されているが、同時に、「生成の世界」自体が客観的に規定されている。この矛盾はニーチェが未だ主客対立図式に基づく近代哲学のうちにあることを意味している。

第4章の「ニーチェ後期思想における『生』の概念」においては、「生」の概念の明確化と、生の探究におけるニーチェの根本的な姿勢の解明がなされている。ニーチェの思想は、生を回復するという目的によって方向付けられているがゆえに、彼の思索は生自身へと向かうことになる。事実的な生は、ディオニソスの衝動とアポロンの衝動との対立において捉えられるが、これらの衝動は結局、ディオニソスの基底から派生したものとされる。ディオニソスの基底とは、生や自然の根本が理性的には把握不能だということを意味している。それゆえに、ニーチェの生に関する主張は、原因や根拠を認識するものではなく、むしろ人間の理性と存在との有限性を主張するものであったということになる。このような有限性の自覚によって、生を探究するニーチェの姿勢は、理性的な認識から、ありのままを承認し肯定する態度へと転換することになる。後期ニーチェにおける生の概念は、人間の認識と存在との両面にわたる有限性の自覚と、その自覚に基づいてはじめて獲得し得る、理性的解釈に汚されないあるがままの生を肯定する態度を主張するものである。

第5章の「ニーチェにおける身体論」においては、ニーチェの主張する「生」が「身体」に関する議論の吟味によって具体的に把握される。後期ニーチェを特徴付ける「身体」の主張は、理性と意識を絶対化する近代哲学へのアンチテーゼとしての意義を持つ。だが、この身体自身、理性的に把握され得るものではない。ニーチェは、自己の身体という自明性を理性的な把握に先んじるものと考え、身体こそが理性的な営みさえも可能にする生の根源であると主張する。身体は理性的に把握される対象ではなく、あらゆるものがそこにはじめて生い立つ「大地」として捉えられるべきものである。ただし、大地自身は理性にとって謎に留まらざるを得ない。しかし、それは否定的なことではなく、むしろ人間存在の根源的な有限性と、人間存在にとっての生のあり方がそこに示されているのである。

第6章の「ニーチェにおけるニヒリズムと自然」においては、ニヒリズム克服の可能性が「強者」像から明らかにされている。ニヒリズムは人間の生の根本的な構造として歴史的に成立したものであるから、人間がそこから理性によって脱することはできない。ニヒリズムからの脱出は、理性的な仕方では自己を把握するに先立って、すでに己の生を信頼することによって生きているような「強者」のみがなし得ることだとされる。理性を絶対化することがニヒリズム的な生のあり方であるとするならば、「強者」はその生においてすでにニヒリズムを脱しているということになる。

第7章の「ニーチェ後期思想における『未来の哲学』の可能性」においては、ニーチェの根本的な思想と「権力への意志」概念の形而上学的性格との矛盾が解釈され、そこからニーチェ後期思想の可能性が考察される。「権力への意志」概念はニーチェの根本的な主張と矛盾するが、それは彼が近代哲学を脱し切れていないことに起因すると考えられる。ただし、「善悪の彼岸」において主張される「未来の哲学」には、形而上学からの離脱を可能にする、「創造」する哲学が語られている。それは、自己の絶対性の否定によって超越をはかる哲学である。「創造」は、ニーチェ自身においては古代ギリシア的な生を理解する試みのうちに具体的に見出される。このように考えると、形而上学以後の哲学の可能性は、ヨーロッパとは異なった異文化における生の理解を試みることのうちで求められていると言えるのではなかろうか。

論文審査の結果の要旨

1

ニーチェが、ヨーロッパの近代思想、更にはプラトン以来の西洋哲学やキリスト教思想に対して鋭い批判を行ったことは広く認められているが、体系的著作の欠如、アフォリズムという表現形式、更に、中心的思想と認められる権力への意志、ニヒリズム等の概念が主に断片的な遺稿での主張であったことから、その哲学的な取り扱いが困難であった。ハイデッガーが自己の哲学とニーチェのそれとの哲学的「対決」という形で、その思想の本質に迫ったことは、それ以後のニーチェ解釈の歴史に大きな影響を与えることとなった。ハイデッガーによるニーチェ哲学の形而上学的な性格の指摘は、現在に至るまでのニーチェ解釈を規定しており、この見解に対する賛否によって現今の様々なニーチェ像が提出されていると言い得る。近年主にフランスにおいて、ドゥルーズ等による一貫した体系的解釈もなされているが、ニーチェ思想の客観的研究の困難さから、思想史的研究、文献学的研究には本格的なものが見られるにしても、ニーチェ思想の哲学的な意義を明確に問題にし得たものは多くを数えないと言って良い。

わが国のニーチェ研究には、これらヨーロッパにおける研究の流れを汲んだもの、あるいは東洋思想の観点から新たな側面を明らかにするもの等がある。しかし、ニーチェ自身の主張の内からその哲学的な意義を解明する試みは少なく、いずれも何らかの哲学的立場からニーチェ思想を照射することに留まっていたと言ってよい。

2

以上のようなニーチェ研究の現状に鑑み、申請論文『後期ニーチェの根本思想』が画期的な点は、どこまでもニーチェの思想自身に即しつつ、その内に哲学的な主張を探り出し、これによってニーチェの思索そのままを哲学的に問題にし得るようにしたことにある。本論文は7章からなる。

第1章ではニーチェ思想の全体的な俯瞰をし、次の第2章、第3章においては、「権力への意志」の概念そして「生成」の概念の再構成とその哲学的意義の検討が行われる。申請者によれば、「権力への意志」および「生成」の両概念をニヒリズムの議論を辿ることによって再構成するならば、それらが実体の形而上学的規定を反転させることによって概念化されていることが明らかになる。しかし、それらの概念によって主張しようと試みられていたのは形而上学自体を克服することであったのだから、これらの概念の持つ形而上学性はそれ自身に矛盾しているということになる。これはハイデッガーによる指摘の通り、ニーチェ思想が形而上学の次元に留まったままであることを意味する。しかし、それらの概念の主張へと至る過程においては、形而上学を超える思索がなされていた。ニーチェ思想の持つこのような両義性という着想に基づき、申請者は後期ニーチェ思想の全体を解明している。

3

ニーチェの思想は「あるがままの生を肯定する生」を回復するという観点から構想されたものである。申請者はこのような生を把握するニーチェの思索の検討を通じて、ニーチェの思惟の立場を明らかにする。ニーチェは事実的な生をディオニソスのとアポロンのとの対立において考えているが、申請者はこの対立が共にディオニソスの基底から派生したとニーチェが考えていたことを証示する。ディオニソスの基底の

主張は、申請者によれば、単に生の具体的な性格を主張するのではなく、むしろ生の根柢、あるいは自然の根柢が理性によっては把握され得ないものだということを主張するものとみなされる。この主張は、人間的理性の有限性の自覚に基づいており、それによって生がそのものとしてすべて承認さるべきであることを主張するものである。人間的理性とそれに基づく認識の有限性の主張は、理性的認識に基づいて原因や根拠を求める近代哲学的な探究のあり方の根本からの転換を求める。更に生を概念をより具体的に把握するために、大地と身体が生根源的なあり方であるとニーチェは主張しているが、しかし、このような生や身体への把握は、それ自身存在全体を自己同一的な存在に基づいて概念的に把握することになると申請者は言う。すなわち、生の把握自身における、生の形而上学化である。既に指摘したように、「権力への意志」概念にもこのような両義性が現れているとされた。したがってニーチェが「未来の哲学」として希望を託するのは、自己の文化の絶対性の否定による超越の可能性であり、それはニーチェ自身においては古代ギリシア的生への理解の試みであって、将来的には異文化理解を通じての自己否定である。

4

申請者は以上のような理解に立って、ニーチェ思想の批判的検討を行っている。ニーチェの根本的な主張は、生を客観的に把握することは不可能であるがゆえに、自らの有限性の自覚を通じてあるがままの生を肯定する生を獲得することであったが、「権力への意志」などの概念を通じてこの生を把握することは、それ自身再び形而上学におちいり、自らの意図するところを損なうことになったのである。これは近代哲学をその近代哲学のうちから克服しようと試みたニーチェの限界であると申請者は述べる。この指摘は、ニーチェ思想の両義性に含まれる本質的な問題をよく明らかにしている。

ニーチェ思想における哲学的問題の本質をその内在的理解から明らかにする研究は、これまで十分には発表されていない。その中で申請者はニーチェの著作、遺稿と研究文献とを読みこなし、このように優れた研究の成果を示すことができた。今後望まれることは、ニーチェと現代の諸哲学との関わりについて立ち入って研究した上で、広い視野からニーチェ思想の意義を明らかにすることである。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成9年2月4日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。